

令和7年度学校評価 計画

達成度(評価)	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

1 前年度 評価結果の概要	<p>・「自立した学習者」を目指して、1人1台端末を活用した授業改善を進め、授業改善につながった。 いじめの認知件数が増えた。アンケートや研修を実施し、いじめが起りにくい集団づくりに継続して取り組み、いじめの早期発見、早期対応、再発防止を心がけ、児童が安心して過ごせる学校づくりを目指していく。 ・児童の主体的な態度に対する承認・称賛を行うため、児童が活躍できる場や機会を増やしていく。また、家庭・地域にも連携を働きかけることで多方面からも承認・称賛を行い、児童の自己肯定感を高めていく。 ・一層の特別支援教育の充実が必要。そのために保護者の願いに寄り添い、一人一人の教育的なニーズに応じた指導・支援を行っていく。</p> <p>・学校の様々な課題の解決に向けて、コミュニティスクールにおいて学校・家庭・地域が連携した取組を行う必要がある。</p>
---------------	--

2 学校教育目標	<p>「美しい心をもち 自分から学び やりぬく子」の育成 ～ 元気いっぱい 笑顔ががやく 若葉っ子 ～</p>
----------	---

3 本年度の重点目標	<p>① 心の教育(道徳、人権・同和教育、学級活動、インクルーシブ教育)による豊かな心の育成 ② 若葉授業と家庭学習習慣の定着による確かな学力の積み上げ ③ 誰もが安心して過ごせる環境づくり ④ コミュニティ・スクールの充実</p>
------------	--

4 重点取組内容・成果指標	中間評価	5 最終評価	
---------------	------	--------	--

(1)共通評価項目				中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組	成果指標(数値目標)	具体的取組	進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)		学校関係者評価		
						達成度(評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○全職員による授業力向上に向けた若葉授業等の共通理解と共通実践	○学力向上対策評価シートの成果指標を達成した教師90%以上を目指す。	・全校で共通の学習スタイルと学び方指導を明確にして、全学級で「若葉授業」に取り組む。 ・主体的・多面的に学びを伸ばすために、各教科の授業の中で児童相互に主体的・対話的に関わりあう「友達タイム」を活用する。 ・家庭学習習慣定着のための啓発、家庭学習推進デーの設定を行い、自ら学習に向かう児童の育成を目指す。 ・校内研究で授業UDや一人一台端末活用の視点に基づいた学習環境・授業づくりを目指す。	B	・各教科等において基本的な学習過程を踏んだ授業を展開することで、授業者、教科関係なく、児童が見通しをもって学習に向かうことはできている。 ・様々な形態やタイミングで対話場面「友達タイム」を設定することで子供たちの発話量が増え、話し合う楽しさを味わうことができている。今後は、学年に応じて、児童自身に話し合う意図を意識させたり、話し合いが生かされている実感がもたせるよう、授業者の意識を高めていきたい。 ・家庭学習推進日は、学年に応じた学習課題や学習量を提示することで、児童自身が調整しながら学習を進めることができるようになっている。 ・授業研究で話題が上がったことや考察したことを職員で共有する機会をつくることで、授業づくりに対する考え方をブラッシュアップしている途中である。	B	・各教科等において、基本的な学習過程を踏んだ授業の展開に止まることなく、児童が主体的に学びに向かうことができるよう職員研修(授業研究会)で意見交換や視点共有を行った。そのことが授業づくりの視点や考え方の深化につながっている。 ・家庭学習推進日の意義が各家庭や児童自身に浸透してきたことにより、自ら課題を設定して粘り強く学習できる児童の割合が増えてきた。しかし、個人差は大きいので、取り組み方の啓発等、引き続き行っていく必要がある。 ・一人一台端末を活用した学習環境づくり、授業デザインを意識することで、学校アンケートにおいて「端末を学習に役立っている」意識の高まり(90%程度)が見られた。	B	・小学校は他人と比べる機会が少ないので、数値化してみることも大事、平均点などを周知すると、自分の現在の力を、子どもも保護者も理解できるのではないかと感じる。 ・タブレットありきにならない教育も心掛けたい。書くこと・体を動かすこと、考えることの大切さも念頭において端末の活用を考える、子どもの特性によって活用を考える、どこに視点を置くか(アナログのよさ、タブレットの効果の高さ)を考える必要がある。	学力向上対策コーディネーター 研究主任
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○特別の教科道徳の授業で考えたことを生活に生かそうとする児童を90%以上にさせる。 ○相手が嬉しい、心地良いと感じる言葉や行動について考えることができる児童を90%以上にさせる。	・道徳の授業の終末に振り返りを行い、実践につなげる。 ・「ほめほめカード」や「がんばったねカード」に自他の良さを見つけ承認、称賛する。学校内だけでなく、地域や家庭にも参加してもらう。 ・「ふわふわ言葉」を学期毎にクラスで考え、目に触れるところに掲示することで、意識して使っていくようにさせる。	B	・授業後の実践につながるよう、学年や個人でワークシートを工夫をしている。 ・「ほめほめカード」の紹介を屋の校内放送で行ったり、保護者からの「がんばったねカード」を校内に掲示したりするなど、承認称賛の輪を広げている。 ・各クラスで決めた使いたい「ふわふわ言葉」を、毎学期末に振り返りを行うことで、積極的に使っていくとする意欲付けを行っている。	B	・めあてに対する振り返りを行うことで、達成できていることと課題に気づき、自分を高めているとする意欲付けになっている。アンケートでも90%以上の児童が授業の中で考えたことを生活の中でも気を付けていると答えている。 ・クラスの話し合いにより、学期毎に様々な「ふわふわ言葉」を決めていた。毎学期振り返りでは、90%以上の児童が進んで使ったことと答えており、意識して使っていくという気持ちが高まっている。	B	・本人を喜ばせる、認めることがいちばん大事。 ・あいさつ(おはよう・こんにちは等)はだいたいできているが、行事などの際に「よろしくおねがいします。ありがとうございます」などがいまいちとつてであると感ずる。 ・考えなくても言える言葉、あいさつなどは割と簡単にできる様子だが、「自分の気持ちを言葉にする」などの部分は十分ではないと感じる。例えば「感想は…?」と問われたときに具体的なことを言えないなど。社会人になってほしいなことを、人の前でも自分の気持ちを話す場や機会を増やす、などのもう一歩先のステップが必要。 ・児童に対するアンケートの内容は妥当性があるか、正確に気持ちを感じ取ることができる内容か。アンケートは実施する側の継続的な改善が必要。 ・ほめほめカード、ふわふわ言葉などの取組が形骸化しないように、前後の指導を、「何のために」の目的や意図の部分をしっかりと子どもと共有して実施することが肝要。	道徳教育推進教師
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめは絶対に許さないという児童の意識、いじめが起りにくい集団づくりに取り組み、教職員アンケート、保護者アンケートの「いじめの防止に努めている」でははまる割合が90%以上	・Q-Uを実施し、その結果をよりよい集団づくりに意識した学級経営に生かす。 ・「いじめ、いのちを考える日」に、児童は毎月、保護者は学期毎にアンケートを行い、個人の悩みやいじめの早期発見、対応を学校全体で取り組む。	B	・Q-Uアンケートを1学期に実施し、結果を学年間で共有分析、取り組みを行い、指導に生かすことで、学年部で子供たちを育てていくという構えをもち、学年経営に臨むことができている。 ・毎月のアンケートを通して、早い段階で児童の困り感を把握し、各担任が丁寧に早期対応し、必要があれば保護者への連絡を行っている。学級・学年部で対応が難しい場合は、管理職を含めた対応を行っている。	B	・毎月1回のアンケートを通して、児童の困り感を早期に発見できるようにし、特別支援を含めた学年担任間で共有、相談し、指導するように努めることができた。学年だけの対応が難しい場合は、管理職にも相談し、複数教員で当たる等、組織的なアプローチを行っている。 ・保護者アンケート「いじめの防止に努めている」項目は、88%で目標値をやや下回った。	B	・児童に対するアンケートの内容は妥当性があるか、正確に気持ちを感じ取ることができる内容か。アンケートは実施する側の継続的な改善が必要。 ・ほめほめカード、ふわふわ言葉などの取組が形骸化しないように、前後の指導を、「何のために」の目的や意図の部分をしっかりと子どもと共有して実施することが肝要。	生徒指導
	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて達成に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●◎「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	・児童生徒の資質・能力を育む授業づくりに関する教材を周知する。 ・各種体験活動では、児童生徒に活動の見通しと学びの振り返りを行う活動を仕組む。 ・キャリアパスポートを活用し、将来の夢や目標の実現に向けて計画的に取り組む。	・「じんちゃん・けんちゃん」の教材を紹介した。 ・クラスによって振り返りの形式は異なるが、個人のみあてに対する達成度を振り返る機会を設け、努力して自分自身を高めていこうとする意欲付けを行っている。 ・年度当初にキャリアパスポートの意義を児童と共有し、めあて達成に向けて、自分がどんな実践をしたかを見直す機会にしている。	B	・児童アンケートで「自分のことを認めてもらったり、ほめてもらったりすることは嬉しい」と答えた児童はだいたいを含めると95.9%であった。これからも承認称賛を続けていきたい。 ・「将来の夢や目標を持っている」について、自分なりの目標を意識し、前向きな気持ちで日々の学習や活動に取り組もうとする姿勢が見られる児童が多かった。 ・めあてに対する振り返りを折りに付け行うことで、達成できていることと課題に気づき、自分を高めていこうとする意欲付けになっている。	B	・児童に対するアンケートの内容は妥当性があるか、正確に気持ちを感じ取ることができる内容か。アンケートは実施する側の継続的な改善が必要。 ・ほめほめカード、ふわふわ言葉などの取組が形骸化しないように、前後の指導を、「何のために」の目的や意図の部分をしっかりと子どもと共有して実施することが肝要。	人権・同和教育担当者	
●健康・体づくり	○「望ましい生活習慣の形成」	○自分から進んであいさつをしている児童の割合80%以上を目指す。	・1年間の生活目標を「あいさつにあふれ、落ち着いたある学校にしよう」とし、「合言葉」の「あかるく・いつでも・さきに・つづけて」の周知・徹底を図る。 ・あいさつについて学期ごとの具体的な目標を示す。 ・児童会を中心とした朝のあいさつ運動を展開する。 ・年に2回生活点検を行い、生活習慣の見直しを行う。	B	・校内で自らあいさつをする児童、地域の方に明るくあいさつをする児童が増えた。しかし、個人差が大きいのが課題である。 ・定期的な生活点検だけでなく、日常的に児童と接する中で見えてくる課題や良い点を共有する場を意図的に作ることで全職員で共有し、共通指導する体制ができてきた。 ・今年度も「あいさつ」のほり旗を作成して各区分長さんやまちづくり推進センターにも配布し公民館等に掲示し、地域ぐるみであいさつを盛り上げるようをお願いした。	B	・校内でのあいさつは、どの学年でも少しずつ増えてきた。「先生や友達に自分からあいさつしようとしている」に対して肯定的な回答をした児童は86%だった。学校だけでなく地域でもできるように継続していきたい。 ・児童会が計画した各学級持ち回りによるあいさつ運動を行い、多くの児童が参加してあいさつすることへの意識付けとすることができた。 ・児童会で考えたあいさつ目標のほり旗を今年度も作成し、校内や地域であいさつへの関心を高めた。	A	・全体的に「B」評価であるが、若葉小の魅力のある部分(あいさつ、おもいやり)などは「A」評価でもよいのではないかと感じる。 ・読み聞かせのときの様子として…話の聞き方がよい。学期ごとに聞く体制ができていてすばらしい。本を読むことの大切さを子どもたちにもっと広げて言葉豊かな環境を築くことで、それが文章を書くことにもつながると思う。	健全な育ち部(課山・城野)
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ●年間20日の年次休暇のうち、職員1人当たりの年次休暇の取得日数14日以上	・毎週金曜日を定時退勤日とし、それを逆算して仕事を効率的に行うような意識づけを行う。 ・教務と連携し、長期休業中の行事や研修会の精選、集中的に行う期間を設ける。	B	・時間外在校時間はR6 26.5h R7 24.4hと昨年度と比較し2時間程減少している ・平均年休取得は12日(12/10現在) ・引き続き積極的に業務の見直し、在校時間の減少、年休取得を図っていく。	B	・時間外在校時間はR6 24.5h R7 22.9hと昨年度と比較し1時間程減少している(1月末現在) ・平均年休取得は13.4日(1月末現在)であり、目標値をほぼ達成できている。 ・中間評価と大きな変化はないが、職員の業務改善への意識はより高まっている。今後は生成AIをより活用し、一人ひとり、そして校務に生かしていきたい。	B	・業務が効率化して年休取得率が高まっているのか?やるべきことができないままになるなど逆の負担が生じていないか?時間短縮だけの問題にならないように。	管理職
	○保護者、職員間の配布物の見直し	○学年通信を廃止し、必要な情報は学校便りやすぐるで配信する。 ○PCの掲示板利用を昨年度を上回る。	・学年通信廃止 ・すぐるの積極的な活用 ・掲示板や事務ポータルの活用	B	・すぐるを積極的に活用できているが、昨年度と比較した具体的な数値がないためB。 ・掲示板の利用は昨年度より微増のペース。	B		B		管理
●特別支援教育の充実	○特別支援教育に関する教員の専門性と意識の向上	○特別支援教育に関する専門性が向上したと回答した教員80%以上	・特別支援教育に関する研修会を実施する。 ・ケース会議の開催、SCやSSWや放課後デイサービス等の関係者間での情報共有を行う。 ・毎月ひまわり部会を実施する。	B	・職員連絡会内で情報共有を行い、ケース会議等に繋げることができた。また、職員のみならず、放課後デイサービス等の関係機関とも連携することができた。 ・毎月ひまわり部会を行ったことは、職員間での情報共有や児童対応の相談の場として有効であった。	B	・知的部・情緒部で1本ずつ「自立活動」の公開授業、授業研究会を行った。児童の実態に合わせた手立てを考え、次年度の課題を見いだすことができた。 ・特別支援教育支援員と毎週情報共有し、きめ細かな指導を心がけるようになっている。しかし、児童の実態に応じた学習課題の精選に課題が残る。	B	・特別支援教育に関する研修やケース会議、ひまわり部会の継続実施により、教員の専門性と意識の向上が図られ、成果目標に概ね到達したと評価できる。今後は実践の質の一層の充実が望まれる。	特別支援教育コーディネーター

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標(数値目標)	具体的取組	進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)		学校関係者評価		
						達成度(評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○教科「日本語」の充実	●保護者・地域等に対する教科「日本語」の授業公開学級率80%以上 ●保護者等に対する教科「日本語」に係る情報を年間3回以上公開した学級率80%以上	・保護者や地域の方々の理解を図るために、全学級で年間を通して1回以上、授業参観等を実践する。 ・教科「日本語」の学習内容等を学級通信等で知らせる。	・教科「日本語」の保護者を対象とした授業公開学級率は66%であり、年間計画に基づいて計画的に実践できている。すべてのクラスが学級通信や週案等で日本語の学習内容についてお知らせできている。	B	・教科「日本語」の保護者を対象とした授業公開学級率は66%と中間評価から変わらないが、年間計画に基づいておおむね計画的に実践できている。 ・すべてのクラスが学級通信や週案等で日本語の学習内容についてお知らせできている。	B	・教科「日本語」はほぼ周知されている。しかし、まだ地域の方で知らない人は多いのではないかと感じる。 ・成果は具体的にみえないが、引き続き取り組んでいき、より質を高めてほしい。	B		日本語
○インクルーシブ教育の推進と個々のニーズに応じた合理的配慮の充実	○生活集会や学年集会などで、年2回程度、インクルーシブ教育についての話しをする。	・教室環境、ユニバーサルデザインの授業作り、教育委員会指導主事によるインクルーシブ教育研修会の実施	・落ち着いた教室環境作りで全職員で取り組むことができた。 ・生活集会や学年集会などで誰もが安心して過ごせる雰囲気づくりを心がけることができた。	B	・交流学級担任と特別支援学級担任、特別支援教育支援員と密な情報共有することで、児童理解に努めることができた。 ・特別支援教育コーディネーター研修会で学んだことを特別支援担任に伝え、指導法改善に取り組んでいる。	B	・生活集会等での啓発や研修会の実施、教室環境の工夫やユニバーサルデザインの授業づくりを通して、インクルーシブ教育への理解と取組は概ね進んだと考えられる。今後も合理的配慮の充実にも努めてほしい。	B		特別支援教育コーディネーター 教務

5 総合評価・次年度への展望	<p>●…県共通 ○…学校独自 ◎…志と誇りを高める教育</p> <p>・学校目標の達成のために、授業改善や心の教育の充実、いじめの未然防止、インクルーシブ教育の推進等に組織的に取り組み、全体としておおむね達成できたと評価できる。 ・全校での共通実践やアンケートの活用、校内研修の充実により、教職員の意識統一と指導力向上が図られ、児童の主体的な学びや安心して過ごせる集団づくりにつながった。一方で、取組の質や成果の見取りには差も見られ、取組状況の共有と検証方法の工夫が今後の課題である。 ・次年度は、成果を基盤に全職員の協働体制を一層強化し、具体的実践の充実と改善のサイクルの確立を図っていきたい。</p>
----------------	---